

◆ 重点普及課題

ヤイトハタ生産流通対策（八重山地区）

八重山農林水産振興センター 知名真智子

1. 目的

八重山地区では、平成10年からヤイトハタの海面養殖を実施している。養殖が始まって10年以上が経過し、近年では、比較的安定して生産できるようになったものの、疾病発生（主に寄生虫症）による斃死が散見される。

昨年に引き続き、ヤイトハタ養殖生産者に対し、水産海洋研究センターと連携して、種苗配布、魚病対策、その他飼育管理についての現場調整や指導を行った。

2. 活動内容

1) ヤイトハタ種苗配布検討会(4月25日)

ヤイトハタ種苗の生産状況報告と配布日程調整のため、種苗配布検討会を開催した。

沖縄県水産海洋研究センター石垣支所木村研究員からは、今期の種苗生産状況が良好であること、生産者の要望（50、70、90mmサイズ）にあわせ5月下旬から順次配布予定との報告があった。今期の種苗要望数は89,000尾（前年度比127%）であった。

牧野普及指導員からは、八島魚類養殖場の環境調査結果を報告した。直近2回（平成23年9月と24年2月）の調査では、水質・底質ともに水産用水基準の範囲内であった。しかし、水質や底質は急変することもあるため、今後も継続的な調査が不可欠である。

また、知名普及指導員からは、魚類養殖場の水温変化と昨年度の疾病発生状況を報告した。昨年も、水温が26～28℃になる時期に寄生虫症（ハダムシやエラムシ）による斃死が散見された。特に、種苗導入後3週間前後にエラムシ寄生を主因とする初期の生残率低下があった。このため、これまでも増して注意するよう、生

産者に呼びかけた。

2) 寄生虫対策指導

種苗導入直後から4週間目までの寄生虫対策を中心に、養殖場での観察と飼育管理指導を行った。昨年同様、種苗導入3週間目頃からエラムシの大量寄生が確認され、これが主因となり生残率が低下した（養殖場全体で約40%）。ハダムシと異なり、エラムシは淡水浴で駆虫できず、肉眼では寄生の確認ができない。しかし寄生し始めると、種苗がアクビをしたり（口を大きく開けたり）、生け簀網の外側を向いてふらつくなどの特徴的な行動が見られる。この点に注意しながら、漁業者とともに餌食いや遊泳の様子などを観察し、寄生虫発生のサインを見逃さないよう、寄生虫対策の指導を行った。

3) 生産者情報交換会(2月19日)

これまで八重山地区のヤイトハタ種苗は水産海洋研究センター石垣支所で生産と配布と配布を行っていた。次年度よりこの業務が栽培センターに一元化されることになったため、八重山地区の生産者に対し、これまでの経緯や今後の種苗生産体制、種苗配布方法についての説明を行った。

栽培漁業センターから石垣までの種苗輸送は、陸送（トラック）と海上輸送（貨物船）を組み合わせて、24時間近くかかることが想定される。生産者や漁協からは、「種苗が長時間の輸送に耐えられるのか」「安全に運ぶことはできるのか」などの意見が出された。これについては、県の方針として、①生産者が依頼した輸送業者への指導を徹底すること、②研究員または普及員が那覇港と石垣港での種苗の状態確認を行うことを説明した。



ヤイトハタ種苗配布検討会 (4月25日)



魚類養殖場 (石垣市八島町)



エラムシ寄生がない種苗 (シェルターに入っている)



エラムシが寄生しシェルター外でふらつく種苗



エラに寄生したエラムシ



淡水浴によるハダムシ除去作業



生産者情報交換会(2月19日)